

第5章 本事業に対する事業評価

1. 参加青年による事業評価

参加者に対してプログラム終了時に事業評価アンケートをオンラインで実施した。主な集計結果は次のとおり。
注：対象の参加青年76名のうち、73名が回答。回収率は96%となった。

値は小数第一位で四捨五入されている。

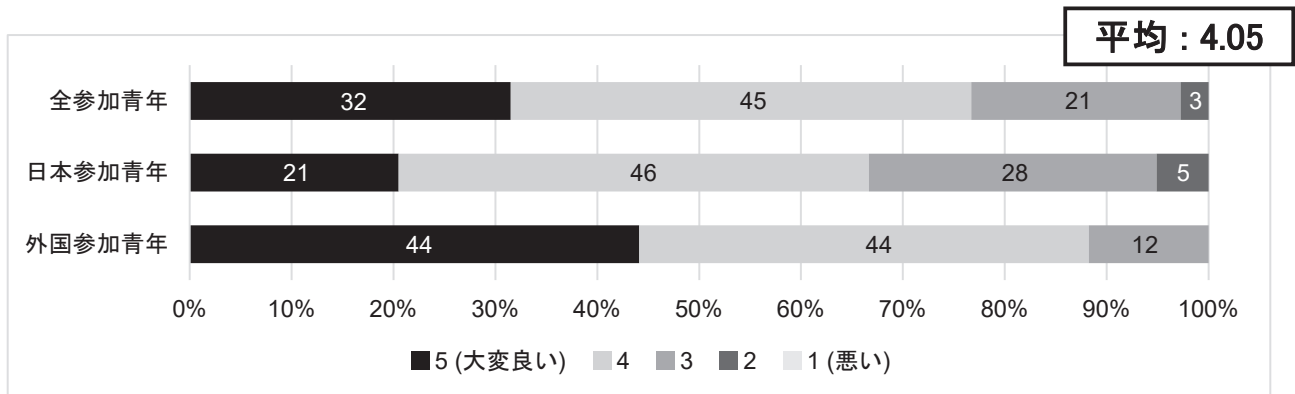
統計処理上、合計が100%にならないことがある。

事業全体に関しては全体平均は4.05で、77%の参加者が4以上（良い）と評価した。

本事業が各国からの参加者間の「相互理解を促進すること」及び「友情を築くこと」に貢献していると思うかとの問いに対し、それぞれ92%、85%が4以上（思う）と評価した。また、本事業への参加が社会貢献活動への参加意欲を高めたかという問いに対し、96%が4以上（そう思う）と回答した。

オンラインでの開催については、70%が「参加しやすい」に5以上（そう思う）と答えた一方、82%が「オンラインではなく対面事業に参加したい」に5以上（そう思う）と回答した。

Q. 事業をどう総合評価しますか。



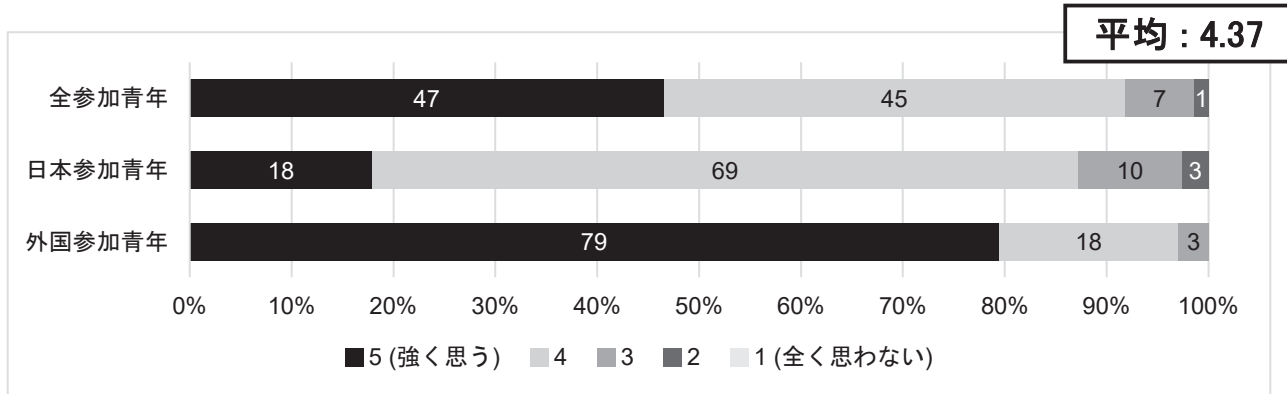
日本参加青年

- ・予想以上に素晴らしい時間を過ごすことができた。
- ・外国参加青年と彼らの国を理解する時間をもっと持ちたい。

外国参加青年

- ・対面式プログラムの代わりにはならないが、オンライン・プログラムとしては優れていた。
- ・とても役に立ち、重要な成果が得られた。どの国にも問題がある事を知った。

Q. この事業が、あなたと各国の参加者との相互理解を促進することに貢献していると思いますか。



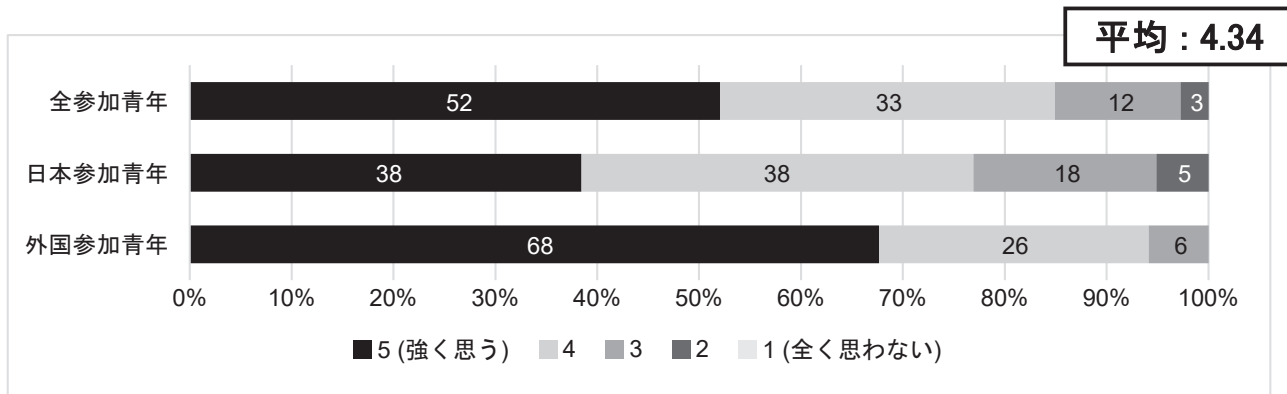
日本参加青年

- ・ワークショップ・セッションは相互理解に対する知識を深める非常に良い体験だった。
- ・外国参加青年の視点で他国や日本を知ることができ、楽しかった。

外国参加青年

- ・「世界青年の船」事業（オンライン）は他国について学ぶとても良い機会であり、尊重し合うことや言語、歴史、文化など参加国の様々な側面について理解することができた。
- ・異なる経験やアプローチを持つ人々と様々な問題について議論できたことは、大きな財産となった。
- ・外国参加青年との文化交流は、諸外国と日本に対する理解を深め、国際的な友好親善を促進する上で非常に重要な手段となった。国家間の相互依存が高まっている現在、文化交流を通じて、各国の言語、習慣、文化伝統などの社会的基盤に対する相互理解を促進し、国家間の人的交流を深めることがますます重要となっている。

Q. この事業が、あなたと各国の参加者との友情を築くことに貢献していると思いますか。



日本参加青年

- ・このプログラムは、参加者の「もっと世界を知りたい」という意欲をかきたててくれた。
- ・グループチャットやSNSでつながったことは、コミュニケーションを取るに当たってとても有効であった。

外国参加青年

- ・パンデミックの状況において新しい人々と出会う素晴らしい場だった。
- ・パンデミック終息後には、このプログラムで出会った素晴らしい青年たちに直接会いに行く旅を計画している。
- ・人と出会い、つながりを持つにはとても良かったが、オンラインであるためなかなか難しくもあった。

Q. あなたは、この事業からどのようなことを得ましたか。(複数回答)

- a. 自分の国や文化への理解を深めることができた。
- b. 自国への誇りを感じた。
- c. 日本に対する理解を深めることができた。
- d. 他の参加国への理解を深めることができた。
- e. よりグローバルな問題に関心を持った。
- f. 多くの友人を作ることができた。
- g. 自分の考え方に影響があった。
- h. 転職を考えるようになった。
- i. その他
- j. 何の恩恵も受けなかった。

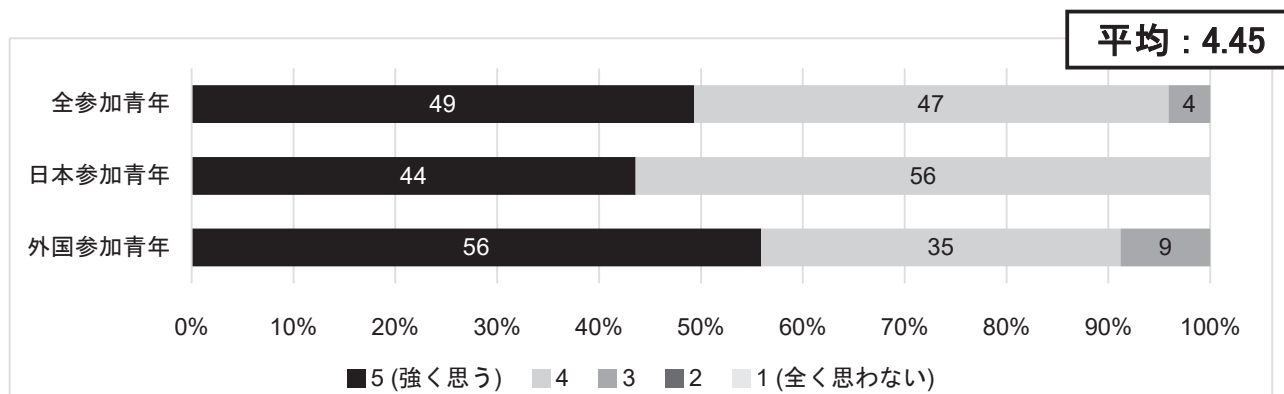
(人)

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
全参加青年	47	34	42	53	56	51	38	24	3	0
日本参加青年	22	11	14	28	31	24	20	15	2	0
外国参加青年	25	23	28	25	25	27	18	9	1	0

i. その他

- ・リーダーシップを発揮した経験
- ・男女間の不平等を変えていかなければならない。それが世界共通の課題であることをコース・ディスカッションで理解した。
- ・もっと起業家精神を持ち、日本語とアラビア語を学びたいと思うようになった。

Q. この事業への参加は、社会貢献活動へ参加したいという意欲を高めると思いませんか。



日本参加青年

- ・現在携わっている地域のボランティア活動の意義を再確認できた。将来的には、さらに積極的に関わってきたい。
- ・参加者から刺激を受け、社会貢献活動への意欲が高まった。
- ・この事業を通じて、自分の興味のあることを再認識した。

外国参加青年

- ・すでに活動している参加青年や、コミュニティをよくするための取組を牽引する学生の話をきいて触発された。
- ・この事業のおかげで、良い将来像が見えてきた。

Q. この事業で得た成果を、事業終了後どのようにいかしていきたいですか。

現在の目標について記入してください。

日本参加青年

- ・新しい友人と多くの問題を議論し、新しい視点を得ることができた。課題に対する情報や考え方を友人や家族に広めたい。
- ・これからも世界や自分の暮らす地域に対して行動を起こしていきたい。共通する問題意識を持ったり活動を

している参加青年がいたので、SWYの経験をもとにメンバーを増やし活動したい。

- ・LGBTQ社会を共創する団体を作りたい。

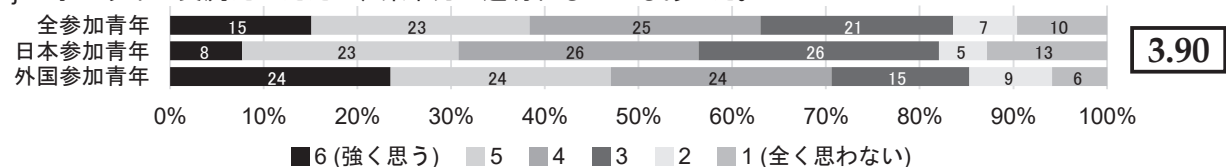
外国参加青年

- ・特に地方の子どもたちに、いろいろな人と話し合う機会を提供したい。
- ・参加青年と相互のプロジェクトを作りたい。パンデミックの状況が改善されたのちは、オンラインで、または可能であれば直接対面で集う共同ボランティアイベントを提案したい。
- ・この事業は、私に知識と自信、そして変化するための実践的なツールを与えてくれた。また、グループ内で効率的に仕事を進める方法や、与えられた機会を最大限に活用する方法についても多くを学んだ。今後は、身近な組織との関わりを増やし、旅行や国際的なイベントへの参加を通じて、異文化について学び続けたい。

Q. 以下の10項目について、オンライン事業に参加した感想はいかがでしたか。



j. オンライン交流だったため、集中力が途切れることもあった。



Q. オンライン事業の良かった点は何ですか。

日本参加青年

- ・パンデミックの時代にこのような国際的な事業にオンラインで参加できたことで、安心して様々な人々と交流ができた。
- ・働いている人や学生、様々な年齢層や専門性を持った人や忙しい人もが参加できた。
- ・場所を問わず、多くの人と交流したこと。家にいながら、新しい考えや新しい人に出会い、見聞を広めることができた。

外国参加青年

- ・プログラムが週末開催だったため、前回の内容を振り返ってから次のプログラムに臨むことができた。
- ・仕事や勉強を長期休めない人も参加が可能だった。
- ・一瞬でお互い顔を合わせることができ、トピックについても話しやすかった。

Q. オンライン事業の改善すべき点は何ですか。

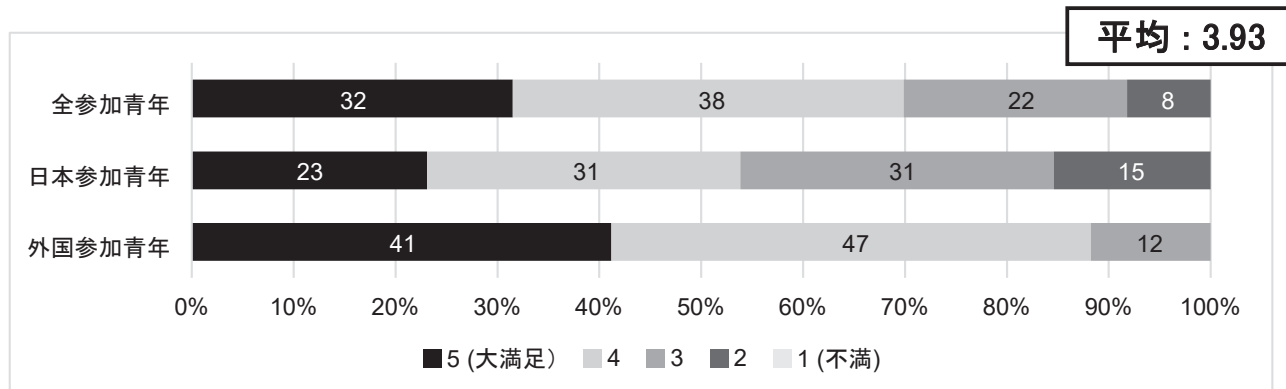
日本参加青年

- ・青年間で強いきずなを築くことが困難であり、お互いを知るには時間が短かった。
- ・カジュアルな会話を行うことが難しかった。
- ・対面式のプログラムに比べ、コミュニケーションの密度が低かった。

外国参加青年

- ・話をしながらランチやコーヒーを一緒に取るといった対面での体験が欠けていた。
- ・インターネット環境が良くないという理由で参加できない人もいるかもしれないこと。
- ・プライベートな話や自然に発生する会話ができる対面交流にとって代わるものはないこと。
- ・時差があり、本事業内では気軽な交流が限定された。

Q. あなたは、コース・ディスカッションの内容に満足していますか。



日本参加青年

- ・プロジェクトを一つ立ち上げて、公的機関や企業とコラボレーションができれば、さらに興味深いだろう。
- ・良い話題ではあったのもっと話したかったが、深く議論するには時間が短すぎたことが心残り。

- ・ディスカッションの時間が思ったより短く、外国参加青年と交流する機会も少なかったので、もっと交流時間を長くしてほしい。

外国参加青年

- ・とても詳しく、問題の本質をつく計画的にマネジメントされたコースだった。
- ・事前知識がある人には、少しばかり基本的な内容だった。事前課題としてもっと多くの関連書籍（論文）の提示がなされることで、全員でより深く議論ができたと思う。

Q. あなたは、コース・ディスカッションの共通テーマとしてのSDGsをどう思いますか。

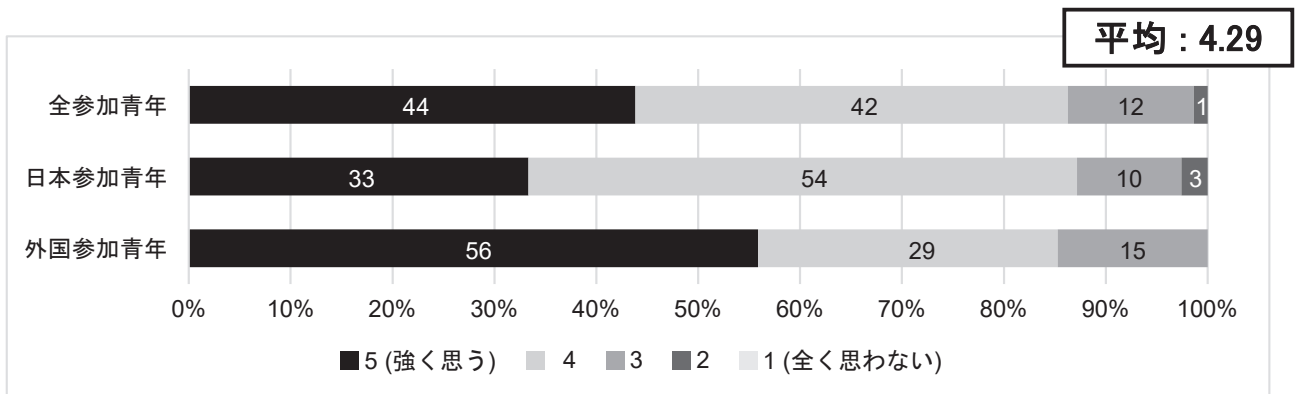
日本参加青年

- ・参加者の背景や各国の課題を理解することができ、SDGsのディスカッションは良いトピックだった。SDGsは私たちが世界中で考え取り組むべきことだ。国際的な視野で理解し、基礎的な知識を得ることができた。
- ・SDGsの各目標は関連し合っているのだと知った。より大きな変化をもたらすために、チームで解決策を探る重要性を知った。
- ・現代が抱える問題を考える良い機会になった。この事業を通じて、さらに社会の問題を勉強していきたい。

外国参加青年

- ・SDGsは、私たちがどのようにシステムを変えるべきかを明確に理解させてくれた。国によって目標やその達成方法は異なるであろう。しかし、SDGsの核心部分について全体で議論し、有意義な考えを得ることができた。
- ・どれほど世界の発展にとって重要であるかを考えると、とても適切なテーマだった。誰もが共感できる幅の広いテーマである。自分の身の回りでどのように実行されているか、または気付かれないでいるかという、それぞれの事例があった。SDGsは多様性に富んでおり、個人的に重要だと思うテーマを選択することができた。
- ・この事業は未来のリーダーを育成することを目的としており、参加者が全人類に関わる問題や解決すべき課題を学ぶというのは非常に良いねらいであり、好意的に考えている。

Q. ワークショップは、各国の文化交流の場としてふさわしいと思いますか。



日本参加青年

- ・他国の文化に興味を持ち、関心を持って関連ニュースを見るようになった。

外国参加青年

- ・コロナの有無に関わらず、不可能なことは何もなく学びを楽しむことができる。全ての人の意見を尊重すべきだということ、そして全ての国の文化に敬意を払うことを学んだ。

Q. 事業全体を通して改善点や提案などがあれば記入してください。

日本参加青年

- ・期間がとても短かった。参加青年とのコミュニケーションや課題を学ぶのに適している。プログラムが週末に開催されたことは、私にとっては都合がよかった。
- ・参加青年と仲良くなれたのは素晴らしいことだったが、事業が終わった途端に別れるのは寂しい。少し時間をおいてから参加者と再会する機会を作る方がいいと思う。
- ・準備だけでなく、コミュニケーションや相手を知るための交流の時間があれば、より良いプログラムになると思う。

外国参加青年

- ・より豊かな体験のためには、時間が短すぎたと思う。
- ・世界規模での事業では仕方がないのだろうが、残念ながらヨーロッパの国々においては、時差の関係で事業の開始時刻が早すぎると思う。
- ・例えばオンライン・ディスカッションの後に対話型コンテンツを設定したり、事業を修了するために全ての参加者が実際に会う機会を準備するなど、プログラムをよりインタラクティブにすることを提案したい。

2. 統率相談員所感

統率相談員：中沢聖史氏（東京都立大学国際センター特任助教）

内閣府が実施する「世界青年の船」事業の魅力は、日本を含む10を超える国の青年たちが、船の上、つまりどの国からも物理的に切り離された空間に一堂に会するという環境にあります。それは例えば、同じ船室で外国の青年と暮らすことにより、座学では理解していたはずの日本との文化の違いに改めてフラストレーションを感じる。あるいは、ディスカッション研修を通して、英語が得意なはずの自分が、英語がそれほど上手ではない他国の参加者に論破されて戸惑うこと。こうしたショックとの出会いに四六時中さらされ、それが特定の国ではなく、世界中から集まる200名以上の青年と船の上の共同生活を通して体験できることに大きな価値があります。そんな事業だからこそ、コロナ禍とはいえ、船での共同生活なしで、オンラインで事業実施をすると聞いた時は、成立するのかどうか疑問に思わざるを得ませんでした。

コロナ禍以前、税金を使って、限られた数の若者を客船に乗せて国際交流をすることに対する批判的な声を時々耳にしました。私は2014年から2019年にかけて、約6年間の間に1200人を超える参加者と船上生活を共にした経験がありますが、当時の日々を振り返り、改めて「船に乗って、海外に行けば、グローバル人材になれるのか」と問いに答えてみようと思います。

物理的な意味で、船に乗って、日本を離れ、海

外に移動すること自体には、当然のことながら人材育成の要素はありません。船の上の研修において重要な要素は、良質なカルチャーショックの積み重ねです。例えば、「5分前行動」を教え込まれてきた日本人が、船の上で10か国の外国の青年たちと時間の感覚をすり合わせることはそれだけで大きなチャレンジとなります。同様に、普段から「空気を読む」ことに慣れ親しんでいる日本人にとって、周囲の意見を気にせず各々がはっきり自己主張をする文化圏の青年を交えた会議を合意形成に導くことは至難の業です。このように、たくさんの文化や個性が交差する環境で、場面に応じてコミュニケーションスタイルを変えられる柔軟性を磨き、違いに対する共感能力を養い、実体験を通して自国と他国に対する理解を深められることが、船での国際交流の大きな価値であり、この原体験こそが、グローバル社会で活躍するための財産になります。

そして、ここで強調したいことは、上述の「良質なカルチャーショック」は、今回の「世界青年の船」（オンライン）でも多くの青年たちが体験していたということです。船の上かオンラインかという差こそあれ、私は今回参加した日本の青年たちが、外国の青年とのコミュニケーションに大いに悩み、戸惑い、苦勞をしながら、失敗や成功を繰り返している姿を目の当たりにしました。時差の関係もあり、昼夜間わ

さまざまなオンラインツールを使って忙しく議論や交流をしている様子を見て、当初懐疑的だったオンラインの国際交流に対して、一定の成果が期待できるように感じるようになりました。

一方で、船の環境と大きく異なるのは、「オン」でつながり、「オフ」で途切れるというオンラインの特性です。船で24時間、共に生活をしていると、ふとした日常の中に無数の小さな役割や発見があります。船酔いしているルームメイトを看病したり、洗濯ものがたまった時に一緒にランドリーを使ったり、夜おなが空いた時にお菓子を分け合ったりというちょっとした役割を果たすことで、交流が生まれます。また、一緒に食事した外国の青年が特定の食材を食べていないことや、いつも部屋で特定の時間にお祈りを捧げるルームメイトの姿を見て、宗教や文化的風習について発見するというようなことも船では日常茶飯事です。オン/オフでつながるオンラインプログラム

では、こうした、ふとした日常に偶然生まれる役割や発見は失われてしまうということを改めて痛感しました。

さまざまな制約の中で実施された今回の「世界青年の船」(オンライン)でしたが、統括相談員として、参加する青年たちの悲喜こもごもに寄り添いながら、オンラインの国際交流の新たな可能性を感じる機会となりました。そして、この体験は同時に、オンラインでは再現できない、船の共同生活の価値を再認識する機会でもありました。参加した青年たちに対しては、「体験した学びの成果を言語化するように」と口を酸っぱくして伝えてきましたが、運営側もまた、事業の成果と課題をふりかえり、オンラインだからこそ実現できたこと、船でしか実現できないことを丁寧に検証する必要があります。そのふりかえりを経て、今後、内閣府がオンライン上で実施する国際交流がますます発展すること、再び船を使った国際交流が早期に再開することを期待しています。